
おっぱい

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

おっばい

【Nコード】

N1926E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幹枝は夫康友が最近よそよそしい態度なのに気付く。どうしてなのかを探っていると。ナンセンスコメディです。

おっばい

第一章

おっばい

如月幹枝は最近夫の康友が不思議でならなかった。どうにも態度がよそよそしいのだ。着替えるのもいつも一人でお風呂もいつも一人だ。夜寝るのも一人であつちの方も完全に御無沙汰となっていた。「ねえあなた」

髪をとかして大きな目でのメイクをあえて色気を漂わせて。そのうえで赤い露出の多い下着を着て夫に迫っても。返事はけんもほろろだった。

「いや、いいよ」

「いいって最近ずっとじゃない」

「ずっとでもいいんだよ」

そう言つて自分の部屋に籠つてしまふのだった。自分の部屋にベツドを持ち込んでそこに入るのだった。

「それでもね」

「いいって。子供欲しくないの？」

「欲しいことは欲しいさ」

そう言つても妻を振り向こうとはしない。自分の部屋に顔を向けているだけだ。

「それでも。いいんだ」

「浮気するわよ」

「するならすればいいさ」

夫とは思えない言葉だった。

「それでも……今は」

おっばい
こつ言つて自分の部屋に消えるのだった。妻につれない。幹枝はそれを見て彼が浮気をしているのではと思つたがそれはどうも違つようだった。探偵を密かに雇つて調べてみたがその結果はシロだった。

「そういうことはありませんでした」
「ないの」
「はい」

その探偵は自分の事務所に来た彼女に対して答える。
「それどころか女性に関する場所は意図的に避けているように思えます」

「意図的にですか」
「そうです」
彼はさらに言う。

「それだけでなく男性も避けています」
「男性も!？」
「実はですね」

探偵は首をしきりに捻りながら彼女に答える。無機質で事務的な部屋の中で話を続けるのだった。

「私は密かに御主人が同性愛者ではないかと思ったのです」
「同性愛者ですか」
「女性を一切近付けないのですよね」
彼が言うのはそこだった。首を捻りながらコーヒーを口に含む。
「確か」
「ええ、そうです」

幹枝もその問いに答える。それは自分が一番知っていることだった。
「ですから」

「それで私もそれを考えてそちらも見てみたのです」
ここで探偵は紅茶を飲む。幹枝には彼女から希望を聞いてコーヒーにした。クリーブと砂糖をかなり入れたコーヒーだ。その二つのせいか見れば彼女の胸はかなり大きい。胸は大きいがウエストは締めまり尻は大きい。肉感的な身体をしてしかも顔は童顔だ。実は探偵はそんな彼女を見てどうして康友が彼女を放ったままにしているのか不思議に思っていた。

「ですが」

「そちらもありませんでした」

こう答えるのだった。

「何も。そうした場所にも通わずそれと思われる交際も」

「なかったのですね」

「はい」

はつきりと幹枝に答えるのだった。

「私にもそれはわかりませんでした」

「じゃあ一体どうして」

「残念ですが私ができるのはここまでで」

申し訳なさそうに調査の終了を述べる。

「あとは」

「ええ、わかっています」

探偵に対して答えるのだった。

「御代は口座に振り込んでおきます」

「それで御願います」

こう話して終わるのだった。だが結局幹枝が望む夫の変貌の理由はわからなかった。つい最近まであんなに夜も昼も求めてきたのにと思う。だがそれでも答えは出ない。そのことへの苛立ちが彼女を遂にある行動に移すのだった。

それは盗撮だった。犯罪めいていると思ったがそれでもそれを選んだ。彼女にとってみればそれしかもう選択肢がなかったのだ。だからそうしたのである。

まずは盗撮の機械を密かに買ってそれを夫の部屋に隠した。そうはわからないように細工するのに苦心したが天井に設けることでそれを解決した。まずはこれでよし、天井に設けた隠しビデオカメラを見てこう思った。

おっばい
それからテストをして映像を確かめる。成功だとわかってからは普段の生活を装った。実際にいつも通りの生活をして夫の帰りを待つ。康友が帰って来るとやはりいつも通りだった。

「御馳走様」

食べ終わると妻を避けて部屋に戻る。その時が来たと思った彼女は自分の部屋に戻って仕掛けた盗撮の状況を見る。見るとそこでは夫が寝巻きに着替えていた。もうシャワーを浴びて後は寝るだけなのだ。

着替えはこれまで彼女が知っているのと変わりが無い。ズボンを脱いでそれから上着を脱ぐ。問題はその上着を脱いだ時だった。

おっばい

第二章

「んっ!？」

夫の胸を見た。何かがおかしかった。彼女が知る夫の胸は逞しく厚い。しかしその胸は何かが違っていたのだ。

大きいのだ。しかも膨らんでいる。シャツの上からもわかるそれは見るからに異様なものだった。彼女はそれを見てまずは首を傾げさせた。

「見間違いかしら」

こうも思った。ところが。それは見間違いではなかった。

シャツも脱ぐと何とそこに現われたのは。女のものだった。幹枝と同じ胸がそこにあった。トランクスを穿いているがそこにあるのは紛れもなく女の胸だったのだ。幹枝はそれを見て自分の顎が外れたのではないかという程口を大きく開けた。そのうえでこれまで出したことのない大きな叫び声をあげたのだった。

「お、女ーーーーーーっ!!」

叫びながら夫の部屋に飛び込む。すると目の前にいる夫は妻の方に顔を向けてトランクス一枚で固まっていた。そしてその胸は。紛れもなく女のものであった。

「み、幹枝!？」

「あなた、どうしたのその胸!!」

さつきと同じこれまでにない慌てふためいた声で康友に問う。

「何の冗談なの、それって」

「冗談なんかじゃない!」

夫はこう妻に言い返した。

「俺だって困ってるんだよ」

「困ってる?」

「ああ、そうだよ」

まだ学生の頃の名残が残る若々しい顔に困惑の色を見せてきた。

七三で分けた髪が揺れる。しかしその揺れ方が今では。女の髪のをれに見えるのだった。

「何でこうなつたのかな」

「自分ではわからないのね」

「わかると思うか？」

二人は台所のテーブルに向かい合つて話をしている。何かあればいつもそこで向かい合つて座つて話をしている。今日もその場所を使っているのだ。

「男がこんな。急に」

「急になのね」

「そつだよ」

困り果てた顔での言葉だった。

「何が何なのか。全く」

「そつなの」

幹枝はここまで康友の話聞いていた。しかしそれを聞いたうえで一つ気になることがあった。そちらを夫に対して問うことにした。それで実際に問うてみた。

「ところで」

「何だ？」

「下の方はどうなの」

「下というと」

「だから。女にはなくて男にはあるものよ」

「こつ表現してきた。」

「ああ、あれか」

「あつちはどうなのよ。異常はないの？」

「ああ、ないよ」

その問いにはこつ答えるのだった。

「そつちはな」

「そつ。じゃあそちらは問題ないのね」

それを聞いてまずは安心した。とりあえずそつちが大丈夫なら、

と妻として安心するのだった。どちらかといえば女として安心したと言ふべきか。

「よかった」

「それはまだよかったさ」

本人もそれは言う。

「けれどな。何でまた胸が急に」

「それでこれからどうするの？」

「医者に行こうか」

首を捻りながらこう述べるのだった。

「やっぱりな。これはそうでもしないと」

「まあそうでもないと治らないわよね」

幹枝も康友の言葉に頷いた。

「手術するなり何なりしてね」

「そうだよな。やっぱり」

「それにしても」

困惑したままの夫の顔を見るのも少し飽きてきたので胸を見る。

見れば見る程大きくしかも形が非常にいい。女の幹枝から見てもそ

う思わせる胸だった。

「いい胸ね」

「そうか？」

「そうよ。私も胸には自慢があるけれどね」

その豊かで張りのある胸は彼女の自慢の一つなのだ。ところがこともあるうに夫がその自分より見事な胸を持ってしまった。男がだ。

それでどう言っているのかさえわかりかねていたのである。

「それでも。これは」

「ないっていうのか？」

「その通りよ。何よ」

溜息さえつくのだった。

「こんなのって。ないでしょ」

「けれど俺は困ってるんだ」

相変わらず困惑した様子を見せる。

「急にこんな胸をもらってな」

「まあ困るのはわかるわ」

自分も下に急に夫と同じものができれば、と思うとわかることだった。これで困惑しない方がおかしい話だ。

「それでもよ」

「それでも。何だ？」

「やっぱり手術するのよね」

「ああ」

妻の言葉にはつきりとした顔で頷いてきた。

「そのつもりだよ。こんなのそのままにしておいたら」

「そうよね。やっぱり」

「あらためて夫の言葉に納得するのだった。」

「それはね」

「だからどうしたんだ？俺が手術したら嫌なのか？」

「別に。ただ」

しかしそうは言いながらも顔は笑っている。くすりとしたものになっていた。

第三章

「ただ。何だ？」

「面白いかしらと思って」

そのくすりとした笑みで夫に語るのである。

「それもそれで」

「御前な、人事だと思って」

「確かに人事よ」

それは自分でも認める。確かに自分が同じことになれば、と思うのは確かだがそれでもこう思うのも事実だった。相反するものだがこうも思うのであった。

「それでもね。思うんだけど」

「何だよ」

「触っていい？」

夫の顔を覗き込みながら問う。

「その胸。触っていいかしら」

「俺の胸をか」

「そうよ。どうかしら」

それをまた問うのである。

「嫌かしら、それは」

「それはまあ別に」

康友もそれには別に拒もうとはしなかった。顔はそのまま困惑したものではあったが。

「いいけれどさ」

「いいのね。それじゃあ」

その言葉を受けて早速胸を触る。するとその感触は女のものと同じだった。

前から驚掴みにしてぶにぶにと揉む。揉んでみると確かに女のものと同じだが同時に心では違和感を感じるのだった。それはやはり

相手が男だからだった。

「何か不思議ね」

あらためてこう言うのだった。

「こんな感触って」

「そう言いながら触り続けてるんだな」

シャツの上から揉み続ける妻に対して言った。

「離そうとしないじゃないか」

「だって面白いし」

その違和感を楽しんでいたのである。

「それに」

「それに？」

「何か楽しみにも思えてきたのよ」

「楽しみ！？どうしてだよ」

「夜だけれど」

話を夜のものに移してきた。

「どうかしら、久し振りに」

「久し振りにか」

「ええ」

胸を掴んだまま身を乗り出してその胸を掴んでいる相手である夫に対して問う。

「いい？」

「そうだな」

最初はそのつもりはなかった。しかし胸を揉まれているうちにその気持ちが変わってきていた。彼はじつと妻の顔を見ながら答えるのだった。

「それもいいな」

「その気になったのね」

「何か胸を揉まれてるとな。いや」

「いや？」

「秘密を言って。すっきりしたし」

それが大きかった。彼にとっては。

「あらためて。何かな」

「何か？」

「悪かったな」

今度は申し訳なさそうに謝ってきた。

「今までな」

「いいわよ。仕方ないし」

しかし幹枝は夫のその謝罪の言葉を笑って受けるのだった。

「いきなりこんなことになったら。私だってね」

「そうなのか」

「そうよ。だから」

さらに笑って夫に告げた。

「仲直りも兼ねてね。いいわよね」

「ああ、いいよ」

胸はまだ妻に揉まれていたがそれを心地よく受け入れて頷くのだった。とんでもない出来事だったがいざ打ち明けてみるとどういふことはない気持ちにもなっていた。その気持ちを心で感じながら妻に対して微笑み返す。胸は大きく柔らかくなってしまったが心は温かくなったのだった。

おっばい 完

おっばい

2008・3・8

おっばい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926e/>

おっばい

2008年11月7日07時13分発行